

ある幕末庶民の米欧体験

——『広八日記』の世界とことば——

彦坂佳宣

はじめに

『広八日記』は、幕末から明治にかけ曲芸団を率いて米欧を巡業した「広八」という人物による巡業日誌である。自筆本が故郷の福島県飯野町（現在）に残され、飯野町史談会の翻刻『広八日記——幕末の曲芸団海外巡業記録——』（一九七七）によって紹介され、安岡章太郎『大世紀末サーカス』（朝日新聞社一九八四）で広く知られた。その後、芸能・文化の面では三原文・宮永孝その他による興行の経緯や内容また行程の追跡などの研究がある。^{〔註〕}こうした研究によって近代前夜に書かれた『広八日記』の価値が明らかになっているが、本稿では特にその表現や記述視点に焦点をあててみたい。

この時期は日本から欧米へ使節団や留学生が派遣され、多くの知識人が外国体験を始めている。この日記はいわばその庶民版である。両者を比較して見えてくるものもある。

表現の上では、西欧文化の導入によって、日本語の語彙面を中心に大きな変化があった。多くの外来語・翻訳語が導入され、今日の日本語の文化的な面の基礎が出来た時期である。^{〔註〕}その原動力は知識人による欧米文化の漢語による導入であるが、庶民側はどうであったか。こうした観点から『広八日記』の世界とことばを考えてみるのである。

一 旅程とことば

広八ら曲芸団一行が日本を出発したのは慶応二年（一八六六）一〇月のこと、米国人興行師リズリーに率いられ、通訳のバンクスが従った。米国からバリ万国博をはじめ欧州各地を興行し、明治二年三月に帰国している。翻刻の解説によれば、広八は文政五年（一八二二）生まれで、日記は彼が四十五歳の時から始まる。日記の初めには広八を含め軽業師十七人の名があり、親子や子供も含まれている。民間人に外国渡航が許されたのは最初の例であ

ると言う。

日記によつてその旅程を辿れば、次のようになる。

横浜出航（慶応二年一〇月）—サンフランシスコ—パナマ

（慶応三年）—ニューヨーク—ワシントン他—フランス（万

国博）各地—イギリス・ロンドン各地（明治となる）—オラ

ンダーロンドン—パリ—イスパニア各地—ポルトガル各地—

フランス—（明治二年）ニューヨーク—往路の逆を帰国。

この旅程を綴る日記は変体仮名の候文を主とする、やや特異なことばで書かれている。特に目につくのは、次のような珍しい表記である。以下、用例の引用は『広八日記』原本によるが、その所在は便宜を考へて翻刻の頁で示すこととする。

・シとスの混同（少例）

すき石（敷石） 六

・イとエの甚だしい混同（顕著）

そのういにのりて（その上に乗りにて） 三四 それい（そ

れ故） 一〇

・いわゆる語中語尾の力行・タ行音の有声化（顕著）、

めづらしぎ（珍しき）物をもらい 一五 はぐらんかい（博

覧会） 二八 さづ（札） 一七

・イとユの混同（かなり顕著）

ゆハい致 九

これらの表記は今日の南奥地方方言の発音特徴とよく一致する。広八は成人前後に江戸に出たと推測されているが、日記を書

いた後まで生育地の方言、少なくとも特に発音の特徴を長く保持していたことが分かる。

文体は候文を基調とするが破綻もあり、文語と口語の混用、多くの当て字、今日から見ると誤字と判断される例も多い。文体を整えるに至らず、出来事の記録を優先させた格好である。月日の見出しの下に、ある時は興行の様子を「大人 相勤候」としたり、「あめりかもとるしたく（アメリカに戻る支度）」など簡略に記し、一方では、初めてのサンフランシスコを驚きの目で記したり、「女郎買ひ」（ロンドン）、「牛ころし（闘牛）」（イスパニア）などでの事件や奇異な光景を評価をまじえて記したりと精粗さまざまである。読まれることを直接は意識しない方言まじりの記述に彼の真情が現われてくる。

本稿では、詳しい書誌と方言に関する点は他日を期すこととし、こうした近代前夜の庶民階級の広八が米欧世界をどのように見たか、どのような言葉で記録したのかという点を中心に考える。

二 米欧で見たものの記述模様—日本から米国までを例に—

本稿で全行程を見ることは出来ないもので、ひとまず日本から米国西海岸のサンフランシスコまでの旅程とその記述の一部を例に示す。

その際、少し前の万延元年（二八六〇）遣米欧使節の一員として正使・親見正興に従った玉虫左太夫の『航米日録』（日本思想

大系・西洋見聞集」所収」と随時比較する。この日録は松沢弘陽「さまざま西洋見聞」（同右の所収）、マサオ・ミヨシ「我ら見しままに」（平凡社一九八四）六七・一六四頁以下他の記述によれば、極めて高い評価がなされているものである。一読して、やはり詳細な記述に、他の遺米記録には乏しい個人的な見解が披瀝され、その観察眼の鋭さを感じさせる。両者を比較することで、『広八日記』の特徴も鮮明になろう。以下、『広八日記』の引用は原文を尊重し、分かりにくい箇所には（）内に注を施しておく。また○印の引用は広八、△印の引用は玉虫のものである。引用例の所在はともに翻刻の頁数で示した。

●太平洋横断

○廿九日此日仲（沖）よりひる九つ時（横浜ヲ）出船致し、八つ時浦川のはなにまいり、くれ六つ時いつ（伊豆）の仲（沖）いまいるなり。一一

△辰前解纜ス：唯舟歩ノ速シユウ忽ノ間・・・已後浦港ヲ過ギ豆州大島海ニ至ル。房ノ州崎、豆の三岬瞬息の間ニ過ギ去ル。：是ニ於テ火船ノ初テ速ナルヲ知ル。一四

経路は同じであるが、広八の記述は淡々としているのに対し、玉虫は常に日時・天候・方位の詳細な記述があり、「火船」（蒸気船）の速さを初めて実感した記述が見える。

この時期、庶民も支配層も外洋を航行する経験はほとんど皆無であった。千石船でさえ沿岸伝いに航行するのを常としたことを考えると、広八の記述は淡白である。

やがて外洋に出て、広八・玉虫の場合とも悪天候に遭遇する。その中で、初めて乗った異国船の頑強さ、船乗りの冷静さに目が向く。

○廿一日朝天氣、それよりあめ風ニテ大嵐となり、船さかたちゆれる事おひた、しきなり：船のういにのほりて見る処、異国船ハなかく物て、なん船（難破船）のよふなる事ハなきよふに思ひ、水風にてハすこしもきすかいなし：神なり様船のよこはらい三間ほとへたちてさかり、よこほはしらをけおり皆々きもをつぶしてさハげ共、異人せんとうハ事ともせず、神様なき国なれハ、これすこしもこハくおもわず也。五

△尋常ノ船ニテハ忽チ破壊ニ及ブベシ。此ホーハタン花旗国モ有名ノ堅牢船ナルヲ以テ其危難ヲ免ルナラン。僥倖ト云フベシ。予等始メテノ航海希有ノ風波ニ逢ヒ誰アリテ心胆ヲ失ザルモノナシ。一八

風雨をものともせず、落雷があつても難破する気遣いのない頑強な「異国船」に、広八も玉虫も驚き、広八は「異国船頭」の恐れ知らずを「神なき国」のせいと観察する。玉虫も似た出来事の後、次のように言う。

△何事ニモ（船員らは）鄭重ニ（日本人を）世話シ、自分ノ業ヲ捨ルニ至ル。其親切感心ナリ。然ラバ夷人トテ漫ニ卑下スルモノニ非ズ。此等ノ人ニテモ聖教ヲ施サバ必ズ礼儀ノ人トナラン。二〇

乗り組んだ米國船員の献身さを評価するもの、「夷人」と見て、精神的な教育によつて礼儀をわきまえた人となる素質はあるうとするのである。

ともに「神国」日本に無条件に価値を置き、それ以外の者を卑下する姿勢である。しかし、やがて広八も玉虫も程度の差はあれ米歐のそれを評価もし、次第に自己変革を見せる。特に玉虫の場合には顕著である。玉虫は上の引用の前部分に、風雨を乗り切つた水夫を褒賞する点に注目し、次のように記している。

△水夫一統へ昨夜勤勞セシ功ニヨリ船將ヨリ千大円銀ヲ与フト云フ。賞罰ノ明ナル感ズベキコトナリ。…尋常ノ船ニテハ忽チ破壊ニ及ブベシ。一八

この箇所を日録の文脈に即して読めば、日本側の在り様への批判につながっている。

●サンフランシスコの様態

船はほぼ一ヶ月後、西海岸のサンフランシスコに着く。その直前からの様子は次のようである。

○廿二日風しずかに相成船もはしる、猶又阿免り加(アメリカ)の國三ふらんせしこと申込みないまちかく相成、日本道里すうに致、海せう二百りととき、て大きによろこひてはしる。…廿六日晴天にてみなと付、皆々大きによろこび…三ふんせしこ(サンフランシスコ)のようたいふねより見る処、きれいなるけしきにておどろき入なり。…廿七日八つ半時二三ふらんせしこいあがり候処、みなと老つはいく

ものこをちらしたるごとくに、見物の人出候なり、しかる処、きん銀のぞふがんうちたる馬車五つ引きたり、それ二皆々打のりてはしるけしきハ、日本にてハ大名もおよバぬ事也 五

人出の多さを「蜘蛛の子を散らす」とする点に未熟さを感じるが、ともかく太平洋を無事に乗り切つた安堵感、続いて初めて見る異国の景色、迎への馬車の美麗さなどに驚いている。以下、日記には「驚き入りたる」「恐れいつたる」などの表現がしばしば登場する。

翌日は市内の見物、その様子は次のように記されている。

○廿九日三ふらんせしこ見物に出候処、きれいなる事、はなしゑにもかきがたし、家ハ五かい又は七かいにして、皆石二てつみあげたる作也、又かわらにて作りし家もあり、猶又水のしかけ、ひのしかけ、車のしかけおどろき入るなり、それより又町道りのよふたいハ、両川三間ハすき石にてつめもた、ぬすきすめ、又中道り三間ほとハくるま道にて、小石にて石た、き、又黒かねにてふたすじあり、是はせきたんおたきてまはる上き車の道なり、ま事二物ておそれ入、見物致候なり。 六

石造りの何層もの建築、舗装された街路、蒸気車の鉄路など、目に入るものが「話にも絵にも描きがたし」と言う具合である。こうした近代の成果である「しかけ」はまだほとんど日本にはもたらされていず、限られた知識人が書物を通して得る知見に過ぎな

かった。

例えばガス燈の「しかけ」は次のように記述されている。

○二日此日夜とぼすあかりの事二付、異人よりかたく申わたされ候なり、是ハ火のしかけ座敷へ、二黒かねにておやゆびほどの丸み二致、なかハうつハにしてあかりのいきのかよふ道なり、あかりの口ハ壱つもあり、又三つ七つもあり、いくす（幾つ）なり共すきほとつけおき、其口のわきにちよつとねちる物あり、是をねちり候いハ、なかよりしすかなる風出候なり、それに火をかさせハ、座敷の中てんのひるよりまたあかるく相成候也、是をけす時二ハねぢりをもとせハきいて（消えて）うせる、是をもとさずふきけし候なれハ、右の火になる風座敷い皆こもり、是をしらすしてすこしなり共火もちまいれハ、すくさま座敷ちう火になり大火ちとなる也、それゆいに異人よりかたく申（ママ）ハたされ候なり、日本人是をしらなきゆいの事なり。六

今日から見ればいかにも素朴な「しかけ」「息の通う穴」「静かなる風」という表現が使われ、また特に取り扱いに注意されたことが書かれている。

ガスについて、玉虫は旅館のそれと製造過程を視察した際に次のように記述する。

△瓦斯燈ノ製造ヲ見ル：此鉄桶ヨリ一鉄管ヲ土中ニ潜通シテ小管數個ヲ接シ、自在ニ每家へ通ジ、席上ニ管端ヲ出シ、常ニ鉄栓ニテ其氣ヲ塞ギ、火ヲ点ズルトキハ其栓ヲ抜キ呼

火ヲワズカニ点ズレバ忽チ燃ルナリ 三一

こちらは漢語による固い表現であるが、その記述の似かよりは驚くばかりである。

こうして広八、玉虫ともに近代的な諸成果に接し、かなり同じ対象を似た表現で記述している。この類似性は彼我の近代化の差に対応する事物を主対象にしている、他の米欧使節の記録とも共通し、その時代性が窺えるが、また広八・玉虫それぞれに個性的な面もある。

三 主要事項の記述とそのことば

『広八日記』は、こうした調子で米欧巡業の様相が記録されていく。以下にはこの日記に現われる主要な記述例をいくつか取り上げ、そのことばに注目してみる。米国に限らず旅程の全体から抽出してみよう。

●「ことば分らず」

広八は勿論、玉虫も米欧の言語はまったく知らなかった。その苦境は次のように記される。

○いすつはんの国まといと申て国のみやこへ付；、此国ハ又すこしもことばわからず、たがいにおしのことくにてこまり候。六〇

○（ロンドン）いろくのことを申候い共、ことハわからずして何ゆふかわからず；、ことばわからずして、しかたを

して、かねいくらとられたとゆふて… 五二

右はイスパニアとロンドンの記述である。広八たちは勿論、通訳ベンクツもスペイン語には手が出なかつたか。「しかた」とは身振りのこと、大金を取られて警察に行くが、どう言つたものか…。次の場合は、背後にある制度の違いが言語の不通を増大させているのであろう。

○「イスパニア」今日へんくつのへやい、がんひう（眼病）なれ共わたくし又定吉、浪五郎三人にてまいり候処たんく

六八

のかけあいにてことハむつかしわけにて御座候。この時の「ことは興行が手詰まりとなりベンクツと談判になる。この時の「ことは難しわけ」は、ことが通じないという表面的な意味だけでなく、交渉事において異国の契約の慣例を知らないことが大きいのではないか。同じように、ロンドンで盗難にあい警察で交渉する時の記述、

○事やわからにつうちを物て申わたされ、是もせひなしと思

ひ候なり、なにこともまたかき物にて相わからぬ事あり、

右ハかくのことに御座候。五六

「通事」を介した説明が分からないのは、書類の難しさの他に、訴訟制度のそのものが分からないこともある。後の二例から考えられるのは、契約・法律制度など近代的な概念の理解があつてこそ分かるということではないか。

それは、知識人であり、探査を熱望した玉虫にはさらに深刻なものであつた。

△万里外ノ地、語音侏離駄舌更ニ通ゼス。何以テ其政事・物情深ク探ルヲ得ンヤ。遺憾ト云フベシ。八

切望して「新見使君ニ陪スルヲ得」た。記録には、新見に従いなからも常に先進的な文物・制度の背後にあるものを見据えようとした様子がある。しかし、漢学に長けても英語の素養のない身にそれが叶うわけではない。「何を以つて…探るを得んや」の表現に、玉虫の痛切な心情が読み取れる。「語音侏離駄舌」とは「意味不明の蛮人の言葉」の意味である。米国人卑下の表現をとるが、かえつて異邦での玉虫の孤立感が感じられる。分かるということ、単に表面的な伝達ではなく、背後にあるものへの理解が必要になるのである。

●広八が耳にした外国語

「あり商」

日記には、ワシントンで「王様」（大統領）に謁見する場面を中心に「あり商」「はり商」の表記が数回使用される。次のような文脈である。

○十二日此日国王にまねかれ御城内ニまいり、王様の座敷ニとふり御目どふりにてあり商致、此あり商と申ハたがいにて手と手をにぎる、此事あり商と申てぢんぎする事なり、

一六

○其夜興行致候処、梅吉ぶたいに出、口ニ手をあではり商致候処、あまたの異人よろこひ、ておうちて皆はり商のちんきを致、おふよろこびにて見物致候。二四

これは英語 Hello であろう。恐らく米国でこの語を頻繁に聞き、耳での印象を綴ったと考えられる。語頭の H を聞いた「はり両」、聞かない「あり両」の様がある。「り」に「両」を重ねた表記は、第二音節にアクセントのある発音を耳で聞いた感じなのではないか。

なお安岡「大世紀末サーカス」一〇七頁は、最初に引用した例を「あつ両」とし Hello としながらも不審とする。これは飯野町史談会の翻刻によったせいと思われる、原文の表記を他と比較すると、やはり「あり両」と読むべきものと思う。

こうした外国語の聞いたままを表記する例は、「此日皆々馬車にてはうくと申処見物ニまいり、道三りほどの処よきけいだいにして入海あり」(八)の Park、「そんな礼にて馬車にて所々見物致」(四〇)の Sunday、「ほうまれんつと申るハ日本にて四ヶ月の事なり」(五四)の four months などがあり、他に地名は頻繁に現れる。

「トロ」

この語は次のような文脈で使用され、英語の roller のことである。

○此夜女郎かいニまいり、勤代トロ五枚日本そうハ(相場)

にして金五両なり 二九

日記では濁点は一定せず、この語は全て「トロ」表記、広八たちが慣用的にトロと言っていたのか、やはりドロであったかは分からない。

これも耳で聞いた英語であり、当時の日本では珍しい形である。福沢諭吉を初め米欧使節団の人々は「ドルラル」とオランダ語風に表記している。この時期、日本ではオランダ語から英語への転換期にあたつていて、福沢らは主として今まで学んできたオランダ語を使用した。玉虫も同じであるが、これに関しては「ドル銀貨」「大円銀」と漢語で表現する。これに対して、広八の表記は現地で聞いた英語のかたちなのである。

「そんな礼」「どんたく」

ドンタクは休日の意味である。今日でも一部の日本語方言で使用され、また年配層は「ハンドン」の語で土曜日や半日の休みを言う。

語源はオランダ語 Zondag、そのなまったものである。幕末から明治にかけての外來語で、日本で広く使用された。

広八もこの語を平常の使用語彙としたのである。日記には几帳面に日曜日と思われる日ごとに●の「どんたく」印が付けられている。ただ、

○●十六日 皆々とんたく、相休候 六二

とする場合は「どんたく」を日曜日でなく「休日」の意味でも使用している。日本では日曜から土曜までの週の導入は明治初期であり、広八の時代にはなかった。そのためオランダ語の語義を拡大解釈して「休日」としたのである。すると七日毎の●印は米欧で改めて週めぐりの単位を体験したことによるものであろう。

なお『日本国語大辞典・第二版』(以下、「日国大」)のドンタク項は一八七〇年代を初例とするが、広八の例はそれを遡る時期のものとなる。

このほか「そんな札」の表記もありSundayをこう表記している。両語の分布を点検すると、ドンタクは旅の初めからニューヨークまでと、欧州に渡った最初のフランスで暫く、そして帰国の洋上で再び使用され、他は「そんな札」「そんなれい」が使われている。ドンタクは広八が通常に使用した当時の日本語(外来語)である。

太平洋や大西洋を渡った直後にドンタクが使用されているのは、船中で日本人同士の会話が中心であったことの反映であろう。他の地域とくに英語圏では英語をよく耳にしてから「そんな札」を使用したであろう。長い旅の中で、よく耳につく現地のことばを取得していく模様が分かる事例である。

玉虫は「ソントー」の表記を使い、サンフランシスコでの初出例では「日曜日ナリ」(六六)と注をし、次の使用では「彼国はソントーニ当レバ」(七〇頁)として、ともに知識の上ながら「日曜日」の方が慣れた様子である。広八の使用した庶民語ドンタクは使われていない。

●近代文明語彙のいくつか

「シャボン」「石鹸」

日記にバスルームの備品として「しゃぼん」(石鹸)が出てくる。『日国大』によれば、スペイン語jabón語源説が有力で、物は一六世紀の南蛮貿易で招来、語は室町末期、その後も一般の人

は洗剤でなくシャボン玉用に使用し、江戸時代にはよく用いられたが、今日では文章語で、「石鹸」が口語として盛んになったとする。

明治に入るまで体を洗うのはシャボンでなく一般には糠袋であったこと、次の例でよく分かる。

○(田舎客が「ヌカ」の文字を「奴」と間違えたのに、風呂の番台から)これは奴が四文じやアござりませぬ。ぬか四文でござります。『浮世風呂』新日本古典文学大系 四三三
シャボンはやはりシャボン玉の用途が主であつたらしく、次の例がある。

○すめる世の露の身過ぎのしゃぼん売り 江戸川柳、安政九、筆力士 『鈴木雑俳語辞典』

体を洗うシャボンが普及したのは、明治期からであろう。『安愚楽鍋』に「いろあさぐるけれどシャボンをあさゆふつかふと見えて、あくぬけていろつややく」とある。そしてこの語は第二次世界大戦前後までよく使用された。幕末期へボンの『和英語林集成』にはシャボンとセッケンの両方が出ている。以上によれば、広八が使用した洗剤としてのシャボンの語は比較的ハイカラな色彩をおびたものであつたように感じられる。

「ブランケ」

『日国大』は玉虫『航米日録』を初例としている。その例も「白羅紗ニ似タル毛長ク且ツ粗ナル：名ヲフランケツト云フ」(四二頁)とあり、まだ物も語形も紹介の筆致である。

広八にはよく使用されているが、その定着度はどうか分らない。初出がワシントンであり、既に長い旅を経験してよく接しからこの語形を出したのではないか。そして、今日の「毛布」よりも広い意味で使用している。

○三尺ほど高さあげだいにとこを取、かなきん二らしやころ、白きふらんけ、いろく／＼のふとん五つかさね、其ういにねる 一八頁

このベットの設えを説明した箇所は今日のシートのこと、

○(ロンドン) せきたんをたきおる大へつついをみたよふなる処、是にくろかねのこうしあり、そのこふしのあいたより火ころげ出て、したにすいたるふらんけに火つきてそれゆいの火ぢなり、四九

この場合はカーベットで、それに石炭の火が点いて火事になったのである。他にマドリッドで「うしと人との死に生きの大いくさ」(闘牛)の際に闘牛士のもつ布も「ふらんけ」と言っている。『日国大』の例から推測すると、この語はまだ日本語として定着せず、広八がこうした未経験の布状のものをブランケの語で表した可能性が高い。「毛布」の語も毛織物の移入と関連して、今日の日常語としては比較的新しい語であろう。

「銀座」「金座」

この語は今日でも広く使用されるが、江戸期には主として幕府が関係する貨幣の鑄造所の意味で使用された。

日記での「銀座」は、やはりこうした意味である。

○(サンフランシスコ) 今日皆々銀ざ見物ニまいる候処、家作四かいにして、猶又それ／＼の役人八九十人も相みい候なり、安内の異人付せい、道工又ハトロふく処金銀ののがね、なに程か相しれず、猶又かねくらの戸定まいを見る処、ひとつのかぎにして四十の定まいせとにおりるなり、又是をあける時ニハ、しめたるかきにあらずしてほかのかきにてあけるなり、猶又金銀ハ何程あるか山のごとくかすしれず。 八

しかし、次の「金座」の例は「銀行」の意味であろうか。

○右やけくすのかね、きんざいもちまへり、八十両三分二取かい、これを物てき物をかい、又なニかをかい候也。五〇
『講座・日本の語彙、別巻』(以下、『日語彙』『日国大』)によれば、「銀行」の語は中国にあり、日本では明治四年(一八七一年)の訳語として「銀行」の字に代用す(福地桜痴「会社弁」とあるのが早い。福地は遣欧使節の通訳として派遣され、こうした制度の紹介に漢籍にある語を使用したのである。それ以前は「為替」「両替」、「銀座」(『西洋事情』一八六六)など各種の語が使われて一定していない。『明治事物起源』(明治文化全集、以下「起源」)に本邦古来の営業名目に恰當するもの無く」とあるように業務内容の変化も考えながら考察する必要がある。広八はそうした活形・業務ともゆれていた時代の人である。

「蒸気船」「蒸気車」

蒸気船が日本にもたらされたのは、黒船ペリーが模型を持参し、

知識人の間では書物その他を通じて幕末期に認知され、米欧使節団も乗っている。彦蔵も「蒸気車」「鉄道」などの語を使用し、日本では明治三年に蒸気鉄道の布設を始めている（以上「起源」）。
 広八も米欧使節団に前後して、サンフランシスコで初めて蒸気車とその軌道を目にした。

○中通り三間ほとハくるま道にて、小石にて石た、き、又黒かねにてふたすじあり、是はせきたんおたきてまハる上き車の道なり、ま事ニ物ておそれ入、見物致候なり。六

○是れより回国入要達（ニューヨーク）と申処いまいる、是ハあめりかいちの大ばなり、此時のり候船ハ上き船、船の長さ窓丁、きれいなる事ひかりか、やき、なかハ町つくりに致、両がハ皆きやへや（客室）なり。又いろいろあきなの家もあるなり。九

玉虫も知識はあったが、実物の蒸気に注目して次のように述べている。広八よりも近代化における意義付けの点を深めた視点がある。

○蒸気器械ハ中央ニアリテ奇巧ノ精密人目ヲ驚スノミ。与ノ如キモノ委シク記ス能ワズ。凡テ車ノ機巧ヲ用ルモノ多シ。蒸気車ニテ万里ノ波濤ヲ平路ノ如ク渉ルハ勿論、諸物ノ運送皆車ヲ用ユ・・然ラバ事ノ便利ハ機巧ニアリト知ルベシ。三〇

玉虫は蒸気船を「火船」「火輪船」とも言う。初めの例は幕府使節団が乗船したホーハタン号の大略を述べた箇所、後者は産業を

視察した時の動力についての言。「蒸気車」は汽車ではなくて動力機関を指し、「車ノ機巧」とは車軸による動力機構を言う。文字通り本格的な近代化の原動力を目の当たりにした漢語表現であり、交通機関としての「蒸気車」と違った意味合いで使用し、近代化の核であるとの認識がある。

もう少し後になると、日本の調査団の目はさらに深まり、蒸気力による近代化がもたらす効用や制度といった発展的な視野に向いてくる。

○万里の大洋を往来して、暴風激浪の難を凌ぎ、攻防の勢力を強くし、貿易の便利を増し、航海者の勇氣、昔時に百倍せり。…各地の産物の有無を交易して物価平均し、都鄙の往来を便利にして人情相通じ、世間の交際俄に一新せり。
 「西洋事情」（『福沢諭吉選集第一巻』）—蒸気船・車について。

「飛脚船」

日記にはまだ「郵便」の語は使用されていない。この制度は前島密が明治三年に導入したものであり、幕末はまだ「飛脚」の語が普通であり、玉虫も「飛脚」、「西洋事情」でも「飛脚・飛脚印（切手のこと）」などの語がある。

○ひきやく船日本より三ふらんせしこへまいる船、三十丁ほどへたちて入ちかへとふる、そふほふにてあいずの大のろし火花をあげ、是ハたかいニ、ふちにて目出たいとゆふしるし也、此船ハひきやくせんと申て、同日同時二日本と又

三ふらんせしことそふほうよりせしよ二出船いたす事なり、それゆい海中の半々の道の処にて、いつまいる時にてもあいたかいにのろしをあげる也、是ま事にべんりのよき船なり。(帰国の洋上で飛脚船がすれ違つた時の記述 七九)

明治三年の制度導入以降に「郵便」の語が定着してくるのである。以上、各種の近代化に関連する語彙を見てきた。広八は日常語で、玉虫は漢語による傾向があり、これと対応するように同じ語でも微妙な意味・視点の差異がある。そしてこれらの表現や語彙はともにまだ近代前夜を感じさせるものと言えよう。

四 異国における体験

●米大統領に謁見

広八はワシントンで当時の大統領ブキャナンと会っている。その一節は次のようである。

○(国王の)座敷くハ申すにおよハす御なままではいけん
致候処、ひかりか、やきて、皆々きもつぶしゆめのこと
く、一七

「寝間」まで見せてくれたこと、全体が極めて豪華な様子の方方に驚く。その記述は、自分を越えたフランクな交流、近代的な設えにただ素朴な驚きの連続である。

一方、玉虫の場合は客観的な視点で詳細な記述をするほか、米

国関係者のオープンな態度に注目し、返す刃で幕府高官の狭量さを批判している。「公然ノ言ハ固ヨリ不可ナリ、敢テ他人ニ示スニハ非ズ」という巻八には次のような痛烈な批判が記されている。

○彼(米側)ハ一ノ隠ス所ナク我国人ニ示サントテ周旋スレドモ、(我側ハ)其心ナキヲ如何セン。…伝聞ニ御奉行等空シク房内ニ屏居シ他ニ一歩モ行カズ、極テ謹慎ナリ。…是レ恐怖セシニヤ、或ハ無学無術ニシテ却テ迷惑ニ及ンコトヲ恐レシナラント云テ、一笑セリトナリ 二四二

玉虫、他にも曰く「莫大な予算で派遣されたのに私的な土産を買いあさる浅薄さ」「異人とむやみに会話することを禁ずる高官たちの偏狭さ」などなど。玉虫自身は正使に従う役割のため、随員として各所を見学すること叶わず、自由な外出などままならなかった。

●在留日本人との交流

米欧州ともに広八らは何組かの役人や留学生らに会っている。

○(ニューヨーク)此日日本人あすひにまいり候て、よもやまの咄を致て、たかいに大きニよろこびわかれば候なり。…三日此夜日本役人三人まいり、ちかづき致、よもやまの咄を致、たかいによろこび候 二〇

○猶又此夜日本殿様清水みんぶ様、此はり(パリ)に長々きうそくあそはされ候いハ、此夜御見物にいらせられ、御よろこびかきりなく、花として式分きん五十兩くたされ候なり

り、そのうい明日御目とより願候処、さつそく御目とより(り)でる用と：一二六

○十五日今日ひぜんの国の人四人まいり、日本の咄を致、たがいによるごぶなり。：廿二日日本人四人あいにくる也。

三〇

こうした交流は、曲芸の見物が契機としても、日本での階級差を越えた形で行われていることが注目される。パリ万国博覧会の準備に来ていた清水民部からは大金の花代を貰い、その後「女郎買い」で事件となった際は個人的に裁判の助力を頼んでさえる。この点、玉虫の経験はかなり違っている。無用な外出や異人との交流は禁止され、従者の身に自由な調査は出来ず、加えて幕府高官の態度は彼を失望させるに十分であった。

こうした交流上の規制は、フランス派遣の場合も同じであったという。松沢「さまざまな西洋見聞」によれば、幕府大老・水野は、首席・柴田の内命で随員が在英仏の薩長諸藩士に会うのを避けたことを知って叱責したという。使節としての各種の利害がからんでのことであろうが、広八らの交友の大らかさはどうであろうか。

ただ、幕末の留学生らはこうした交流を通して研鑽し合い、その後、日本の近代化に多大の貢献をしたが、広八の場合、異国での交誼に始終したのはやむを得ないことであろう。

●近代的制度との出会い―警察・裁判の制度

さて、広八はロンドンで「女郎がい」の際、女に「きんちゃく

を盗られる。

○女ハにけんとする、すこしこハたかに相成候ゆい、やとやの者共かけきたり、なに事と申候、女ハなにかいずわりをゆいきかせ候ゆい、ていしもわれをわるく思ひ、いろ／＼のことを申候い共、ことハわからすして何ゆふかわからず、た、われにばかり皆々取つき女いすかたいかけうせけり

五三

という具合である。ことばの通じない悲哀を感じたことであろう。しかし、広八はめげず警察に訴え、三度にわたる呼び出しがあり、容疑者らの面通しの末にとうとう犯人を見つけ出し、裁判に勝利する。この事件の顛末は日記の山場の一つであるが、興味を引かれるのはその際の警察や裁判制度についての評言である。

まず、広八の再三の「われ申用、きつと見まちかいなし。しかと覚あり」と似顔絵を書いたの訴えに、役人は次のように言う。

○其時又役人申けるハ、其女みまぢがい候時ハ、其方ろうしや(牢舎)のきうじよう(窮状)なると申わたされける

五二

そして、三度にわたる呼び出しをし、容疑者を混じえた複数人を広八に合させた。その時、仲間の女を見つけたので尋問を要求するが、警察は「これ国の法しきなれハ、当人ならてよ人はきんみ相ならず」と言う。広八は「われおもふよふ、さてハ日本人ことハわからぬゆい、た、よきよふにたます事」と思うが、そうではなかった。三度目の呼び出しで、前回不審に感じた女が違う着物

で現れたのに気づき、

○日本人をばかとして役人のわざか、是はいか、なるやと申

あけ候。五三

と言うと、役人は次のように言い、女を逮捕する。

○それにてかねを取し女ハわかり候。とがなき女ニなわか
候いハ、そのとかとして其方ニなわをかけるか国方（法）、
それゆい目たかいなきし、同女三たひだしたり。此方
りた、すへきと思ヲうちよくもみおほい申し上げたり。そ
れてこそ此女にまちがいなしとすぐさまかなてちよう（金
手錠）うち候なり 五四

広八はここに至つて「此時われもなるほと、とかんち入おそれを
なし候。是まてはハた、はかにされると思ひはらたち候共、むね
はれてみれハ、なる程異人よりわれがばかにて候」と記している。

日本での取り調べと異なり、この記述によればイギリスでは直
接の容疑者以外を取り調べる権利のないこと、誤つた証言は訴人
の咎となること、逮捕には証拠をもつてすることが必要なことな
どを身をもつて知り、広八なりに感じ入つたのである。

そして裁判が始まる。裁判所のいかめしさは「大御番所にて、
くろかねのつくりにして門大きな事みあげる程あり、又なかの
び、しき事おそろしや（五四頁）」と記し、その裁判には、

○口がきお取用（様）なる役もあり、又利かおゆふよふな
る役もあり、又とか人のみかたとなりて利かおゆふよふな役、
又願人のかたになり利かおゆふよふな役もあり、なか／＼もつて

むろきのつみ二おとすなどトゆふよふな事ハすこしもなし

五四

と檢察や弁護士、書記のそろつた裁判制度に感心している。

結局、「たん／＼きんみのうい女ほうまんつのろふしや；是ほ
うまんつと申るハ日本にて四ヶ月の事なり」となる。広八はそれ
に對し、強く抗議するが、

○すぐニ申あける、さて日本にてハ拾兩とまとまりしかねを
取候ならハくひがなし、是たけのかねを取て四月百日のろ
ふしやにて事すむならハ、われ国いもとりせかれ共にゆい
つけ、異人イギリスの人みるならハいくらでもどろほう致、
四ヶ月のろふしやいた、き候と申あけれハ、役人申用、ふ
ひんなれ共国ほうなれハせひなしとあきらめてと。五六
と「是もせひなしと思ひ候なり」と諦める。

これに続けて「なにこどもまたかき物にて相わからぬ事あり」
とするのは、第一には裁判上のことばの難しさを言うのであろう
が、背後に江戸期の取り調べとあまりにも違うシステムがあつた
に違いない。それにしても広八の記述は、警察や裁判所をまだま
だ「お上」として「恐れ入る」態度が強いものの、素朴な行文の
中に次第に西欧の近代的な制度への理解を深めていく様子が読み
取れる。

概して初期の遣米・欧使節は目にする文物への注目度が高く、
やがて次第に背後にある論理・思想の調査へと深まっていくよう
に思う。広八の場合、こうした視点の深みには及ばないまでも、

西欧社会で身につまされる個人的体験をして、日本と比較する視点が生まれ、制度の在りようにも記述が及んでいる。

●異国・異人を見る自己

広八が船を襲った嵐の際に、「異人せんとう（船頭）神様なき国なれハ、これすこしもこハくおもわず」と書いたことは先に引いた。神国・日本を美化しているように見えるが、しかし、全体に広八は見聞した事柄に即して喜怒哀楽を直裁に記しているに過ぎない。言い換えると、そうした見聞の集積が自身をゆさぶり、自己変革を遂げるようなことはない。

例えば、初めて米国のサンフランシスコに上陸し家作・街路を見て「はなし糸にもかきがたし」（六頁）と驚き、パナマ通過の際に黒人を見て「ちくしよのごとし」「へんちくなる国なり」（二〇頁）と言ひ、パリ万博で「風船（気球）を見て「今日もめづらき物見ておとろき」（二八頁）、オランダでは「家作わるく人わるし、又国も同あしく：」「ごくそづ（獄卒か）の国に御座候」（四五頁）と言ひ捨て、そこで「オランダ人の」人ぎ（気）わるければ：」群集に囲まれて喧嘩になり「われわれのきつよきは右御老中御奉行様よりいた、きたる御いん書を物で（持て）いるゆい（故）」（四六頁）と勇気を奮うが、それだけのこと。フランス・リヨンで「はうく（bas）の「船ゆさん（遊山）」で親切にされて喜び、そうして再度米国から太平洋を渡つて、横浜で「徳川様より下しおかれたる御いんしよ」を納め、「恐れいりてさがり」、明治となった「東京いき国（東京へ帰国）」（以上、八一頁）

して無事に帰った祝いの記述で終わる。貴重な見聞をしたもの、ぐるつと回つて元の封建下の広八に戻るとして差し支えないように思う。

この点、玉虫の変容と批判的な視点は先学の言うようにやはり特筆すべきである。彼は渡米の船中で米船員らの人・言葉・音楽を「夷人・夷語・胡学」とし、日本の音楽を「正楽」と呼ぶほどに国粹的な面がある。しかし、次第に米国を「然ラバ礼法ニ於テハ禽獸同様ニテ、取ルニ足ラズ、唯器械ノ精密ハ彼ニ譲ル万々ナルノミ。」（三一頁）と近代機器面の優位さを認め始め、終には、米艦の船長と船員が「上下相混ジ」「同輩ノ如」「万一事アルトキハ各力ヲ尽シテ相救フ」様子を認め、省みて「我国ニテハ礼法愈厳ニシテ：其規格ハ如何ニモ厳ナレドモ情交日ニ薄く、：万一緩急アラバ誰カ力ヲ尽スベキヤ。是昇平長ク続キタル弊ナランカ。礼法ヲバ厳ニシテ夷俗ノ相蔑視スルニ至ラズ、交情厚キハ彼等ノ如ク、両ツナガラ宜ウスルノ道ナカランヤ。予敢テ夷俗ヲ貴ムニ非ズ、今日ノ事情自ラ此ノ嘆息ヲ発セザルヲ得ズ」（二三七頁）と記すまでになる。「夷俗」の語は相変わらずであるが、彼我の背後にあるものを探る批判的な眼がうかがえよう。玉虫は後に脱藩した仙台藩に復帰するものの、非業の最期を遂げたという。こうした批判力が負に働いたこともあったのではないか。

以後の遣米・欧使節の記録は、中にはただ表面的・感慨的なものもあるが、西欧文化の根底にあるものの探求眼にあふれてい

おわりに

以上、駆け足で『広八日記』を玉虫のものと比較しつつ見てきた。前者は素朴な巡業見聞記、後者は貪欲な文明観察の記録であり、比較は唐突に過ぎたかも知れない。しかし、見聞する事物とその記述の共通度は驚くべきもの、近代化を迫られた幕末期の知識層と庶民層がともに感じた事柄の一斑が知られるのである。幕末期の米欧観察は幕府・有力藩の知識層によるものばかりであったが、この日記はそれと異なる立場からの証言のように思われる。

付記

用例は自筆日記により、適宜カッコ内に注を施し、用例の所在は翻刻本の頁数を示した。玉虫『航米日録』は『日本思想大系』により、引用例の所在はやはりこの頁数を示した。

注

- (一)三原文「軽業師の倫敦興行」(芸能史研究一一〇、一九九〇)、同「米国興行に賭けた芸能六座の動向」(芸能史研究一二七、一九九四)・同 Little "All Right" Took the Stage: A tour of Japanese Acrobats in Western Europe (大谷大学英語英文学研究)二三、一九九六)、宮永孝『海を渡った幕末の曲芸団』中公新書一九九九、本多隼男

「わが国初の海外巡業曲芸団―『広八日記』刊行の意義と時代背景―」(北斗の会「自由人」二、一九七六年三月)。以下、広八の興行の諸点はこれらの研究を参考にした点が多い。

(二)国語学の分野では、この時期から明治中期にかけての訳語研究の成果は、広くは例えば盛岡健二編著『改訂近代語の成立―語彙編―』(明治書院、一九九二)、具体的な分野の例は手島邦夫「西周と『明六雑誌』の訳語」(国語学研究、三九、二〇〇〇)などかなりある。本稿は一部の語彙を示したのみで、これらの研究における『広八日記』の位置付けは今後の課題である。

(三)広八と前後する時代にあたる福沢諭吉のものは、例えば川上勉「幕末・明治期における近代的知識人の生成―福沢諭吉の外国体験―」(西川長夫・他編著『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、一九九五)がある。

謝辞

飯野町の高野家・同町教育委員会には、資料の閲覧その他のご教示を頂いた。記して感謝します。

(ひ)なか・よしのぶ 本学教授)